

一 「浄土和讃」「高僧和讃」に於けること十年、親鸞八十五歳のころから「正像末法和讃」はその作成がすめられ翌年に成立をみた。八十四歳の康元元年(一一五六)夏に息男善鸞を義絶し、鎌倉における念仏についての訴訟事件をめぐって動揺する東国の門弟に精神的に他力信心のあり方を訴え続けた親鸞は、末法濁世の現実を生きたことの悲歎を味わったが、それにもかかわらずどのような者をも見捨てない弥陀の本願への讃仰の念をますます深くした。

二 善導の著作。一卷。正しくは『依観経等明般舟三昧行道往生讃』と云々、略して『般舟讃』とよぶ。以下の二行は『般舟讃』巻頭の引用。「一切往生知識等」は、往生浄土を願うすべての人々の意。この場合の「知識」は、縁のある人々を意味する。「無上信心」は他力廻向の信心のこと。文明本にはこの引文はなし。

三 一一五七年。親鸞八十五歳。三月に正嘉と改元。

* 234の夢告和讃は、草稿本である国宝本では、正嘉元年閏三月一日に「この和讃を夢に仰せを蒙りてうれしきに書きつけ参らせたるなり」と付記し、一連の和讃(三十五首)の次に書き加えられている。濁世の人々は大悲の本願をたのみ、他力廻向の信心に帰すべきことを明らかにする。

234 弥陀の本願信ずる人はみな
撰取不捨の利益にて
無上覚をばさとりなり

正像末法和讃
般舟三昧行道往生讃曰
敬白一切往生知識等
是慈悲父母 種種方便 發起
我等無上信心
須愧一釈迦如来
康元二歳丁巳二月九日夜
寅時夢告云

234 弥陀の本願信ずる人はみな
撰取不捨の利益にて
無上覚をばさとりなり

234 弥陀の本願信ずる人はみな
撰取不捨の利益にて
無上覚をばさとりなり

四 文明本は「正像末浄土和讃 愚禿善信集」とする。
* 235の十六首は、末法における釈尊の遺教の衰滅と五濁が増大する時代相を示して悲歎する。

235 釈尊がおかれになつてからすでに、二千余年が過ぎ去り、正法・像法の時代はすでに終つてしまつた。釈尊の亡きあとに生れてきた弟子たちは、この末法の時代を歎き悲しむべきである。

◇釈尊 文明本には「釈迦如来」とある。◇正像の二時 釈尊の滅後千年(五百年説もある)を正法と云ひ、教説(教)とその実践(行)と、その成果(証)とが正しくそなわり、釈尊の教えが完全に行われる時代。その次の千年(五百年説もある)を像法といい、教と行は成り立つが、証を得る者がない時代。

236 末法五濁の世は、人間が教法にもとづく修行や、修行によつてさとりを得ることが不可能な時代なので、釈尊が遺された教法はすべてみなこの世から失せて、竜王の宮にかくれてしまわれた。
◇五濁 劫濁(時代の濁り)、見濁(思想の乱れ)、煩惱濁(悪徳の栄え)、衆生濁(人の資質の低下)、命濁(生命力の衰え)をいう。◇有情 すべての生きものをいうが、ここは人間のことをいう。「浄土」「高僧」の二和讃には旧訳の「衆生」の語が用いられ、「有情」は全く用いられないが、「正像末法和讃」では、主に新訳の「有情」が用いられる。◇遺法 釈尊の説きのこされた教法。◇竜宮にいらたまひにき 『末法燈明記』に、末法がきまわつて「教法竜宮に蔵る」とある。

235 一 釈尊かくれましまして
二千余年になりたまふ
正像の二時はをはりにき
如来の遺弟悲泣せよ

236 二 末法五濁の有情の

行証かなはぬときなれば
釈迦の遺法ことごとく
竜宮にいらたまひにき

* 親鸞の京都退隱後に關東門徒の間で念仏信仰をめぐる異説が行われたこともあって、親鸞は息男の善鸞を下向させた。ところが善鸞が、「日頃の念仏はみな、いたづらごと」であるとし、「第十八願をばしほめる花にたとへ」る邪説を説くに及ぶや、親鸞は門徒の動搖をさしづめるため善鸞を義絶した。この事は、第二― 出会いによる得信うした事情を背景

七 親鸞の真意を問ひ質すべく上京した關東の弟子に対する返答の言葉と考えられる。この「おのおの」も常陸の門弟と考えられる。常陸から上京するには十数カ国の境を越えねばならない。

八 親鸞自らは「往生極楽」の語をほとんど用いない。ここは質問者の言葉をとって用いたと考えられる。九 善鸞は、秘密の法文(仏法を説いた文章)を親鸞より伝授された東國の門徒に言ひふらしていた。

一〇 「南都」は奈良。ここでは奈良の東大寺・興福寺などの諸大寺を意味している。「北嶺」は京の北方の山、比叡山をいうが、ここでは延暦寺・三井寺を指す。一一 仏道を修めて師匠の資格を持つ学僧。一二 自己を「親鸞」と称し第三者的に語るの、単なる自称ではなく、本願他力のはたらきに撰め取られた自己の在りようを自覚化したためと考えられる。一三 「ただ」は、「唯信」「唯称」の「唯」にあたる語で、他をかえりみずにひたすら、の意。

歎異抄

一 建長五年(一二五三)四月、比叡山を下り安房清澄寺に帰った日運は、法華信仰に立つて諸宗破折の説法を始めたが、その際特に念仏を攻撃し、念仏は無間地獄に墮ちる業因であると力説した。このことは關東の念仏者に大きな衝撃を与えないではおかなかつた。

二 念仏以外の修行。三 親鸞は「教行信証」行巻で「如来世に興出したまふゆゑは、ただ弥陀の本願海を説かむとなり」と述べている。釈尊がこの世に現れられたのは、弥陀の本願の広大なるはたらきを説くためであったというのである。そうした信仰の原点をあえて仮定の形で語ったのは、弥陀の本願の眞理性を信心の独断から区別して語るための用意であつたと思われる。

四 善鸞・道禪の浄土教を受け継いで中国浄土教を大成させた唐代の僧。親鸞は、「善導ひとり仏の正意を明せり」「正信偈」と言っている。第十八願によって何弥陀の名を称えることを「正行」として善導の『觀經疏(觀無量壽經)の注釈書』との出会いが法然に廻心をもたらした。「御釈」は『觀經疏』を指す。

五 親鸞は、弥陀の本願に疑いをはさむ立場にまでおり立つて信心の根柢を説き聞かせ、弥陀の本願が釈尊・善導・法然といった宗教的な人格をこの世に生み出し、「説教」「御釈」「仰せ」の言葉を介して紛れもなく今に伝えられた事実を示した。経の言葉を受け容れるところに成立する信心の眞理性を法然聖人の存在によって証明したからには、といった思いが読みとれる。

一、「おのおの、十余カ国の境を越えて、身命をかへりみずして、訪ねておいでになられたら、お意向はたづねきたらしめ給ふ御ところざし、ひとへに、往生極楽のみちを問ひきかんがためなり。しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも知っており、また、法文等をも知りたるらんと、こころにくく思しめしおはしなす侍らんは、大きな誤りなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき学匠たち多くおはせられて候ふなれば、かの人にもあひたてまつりて、往生の要、よくよく聞かざるべきなり。親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられ参らすべしと、よき人の仰せをかぶりて、信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏は、まことに、浄土に生るるたねにてや侍るらん、また、地獄におつべき業にてや侍るらん、総じてもつて存知せざるなり。た

とひ、法然聖人にすかされ参らせて、念仏して地獄におちたりとも、けつして後悔するはずはございせん。さらには後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行も励みて仏になるべかりける身が、念仏を申し地獄にもおちて候はばこそ、すか巧みな言いくるめをこうむつてされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても、地獄は、一定、すみかぞかし。三 弥陀の本願まことにおはしなす侍らば、釈尊の説教虚言し給ふべからず。善導の説教が眞実であらせられるならば、御釈まことにおはしなす侍らば、法然の仰せまことならば、親鸞が申す旨、またもつてむなしはるべからず候ふか。四 結局のところ、愚かな私の信心については以上の通りです。念仏信心の立場にたつて他力加持を寄せ申し上げようとも、面々の御はからひなり」と云々。

新潮日本古典集成 伊藤博 校注(五二二)より